

日本薬学会 第129年会（京都）一般シンポジウム S-30  
「創薬を目指す量子ビーム施設—放射光と中性子の有効利用—」  
“Quantum Beam Facilities aim at Drug Discovery  
— Effective Use for Synchrotron Radiation and Neutron —”

日時：平成21年3月27日（金）15:00～17:00

会場：グランドプリンスホテル京都Y会場

オーガナイザー：西島 和三（持田製薬 医薬開発本部）

清谷 多美子（昭和薬科大学 機器分析研究施設）

15:05～15:15 昭和薬科大学 機器分析研究施設 清谷 多美子

「量子ビーム施設の概況」

15:15～15:35 S30-1 高エネルギー加速器研究機構 放射光研究施設 若槻 壮市

「ターゲットタンパク研究プログラムで目指すX線構造解析の高度化」

15:35～15:55 S30-2 理化学研究所 SPring-8センター 山本 雅貴

「放射光マイクロビームが可能にするタンパク質微小結晶解析」

15:55～16:15 S30-3 高輝度光科学研究センター 熊坂 崇

「SPring-8構造生物ビームライン」

16:15～16:35 S30-4 日本原子力研究開発機構 黒木 良太

「中性子と放射光の相補的な利用による創薬標的タンパク質の立体構造解析」

16:35～16:55 S30-5 茨城大学 工学部 田中 伊知朗

「供用開始に際したJ-PARCの新しい生物用中性子回折装置（iBIX）」

開催趣旨：

大型放射光施設（播磨SPring-8、筑波PF）は種々の研究分野で利用されていますが、特に物質・生命科学研究への貢献が顕著です。その放射光施設の有効利用によって多大な成果をあげたタンパク3000プロジェクトに引き続くターゲットタンパク研究プログラムでは、放射光施設の更なる高度化を目指した研究も進行中です。また、製薬企業コンソーシアムはタンパク3000の恩恵を受けて専用ビームラインを保有し、その研究成果を創薬に利用しています。一方、物質・生命科学、原子核・素粒子物理、核変換技術等への貢献が期待される大強度陽子加速器施設J-PARCの利用開始が2008年度中に計画されています。電荷を持たない中性子は放射光とは異なる散乱によって、タンパク質の構造機能解明に役立つと期待されています。このような状況下、量子ビーム施設に関わる第一線の研究者から創薬を目指した放射光と中性子の有効利用をテーマとしたシンポジウムを、広く薬学分野の研究者を対象として企画しました。多数のご参加、宜しくお願いします。